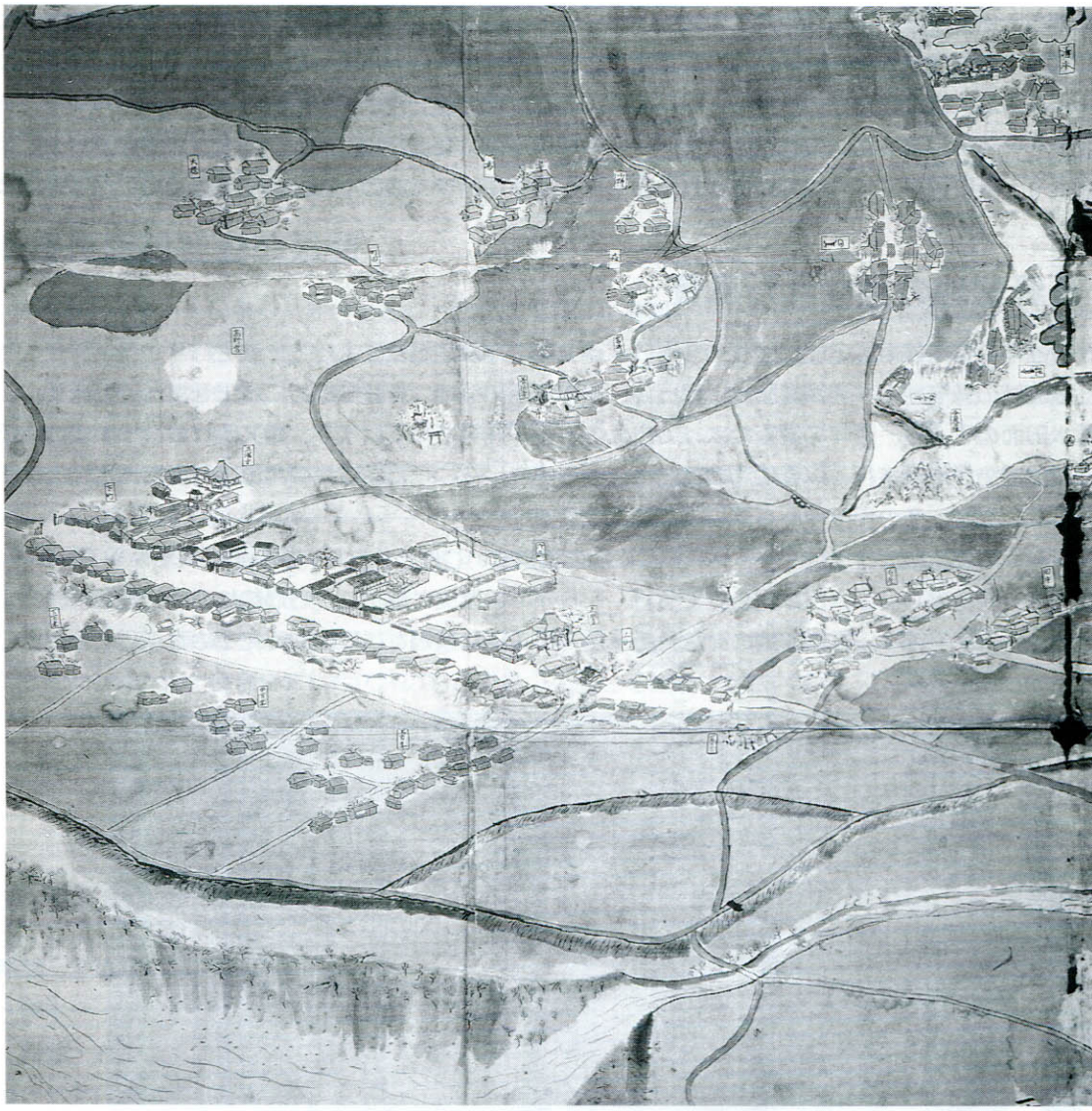
長野市立

博物館だより

第23号



江戸時代の綿内村

（綿内村役場文書・当館蔵）

第31回特別展

「水・稲・祭り ―発掘された古代の水田―」

1992年９月20日～11月８日

●米づくりの始まり

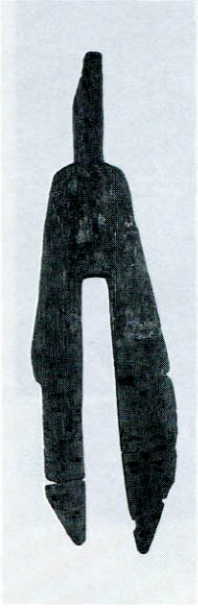
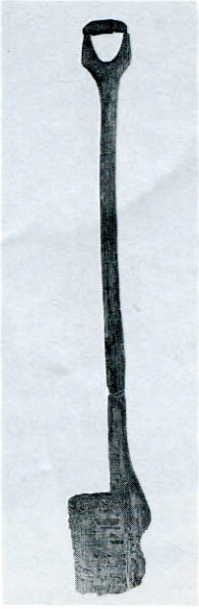
私たちの祖先が米づくりを始めたのは2400年も前のことです、以来今日まで日本人は米とつきあうようになり、米は日本文化を形式していく過程で大きな役割を演じてきました。

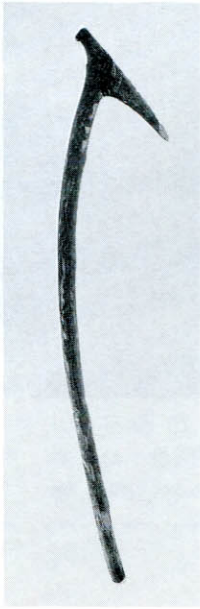
稲作技術は大陸からもたらされたものであり、それ以前の縄文時代採集経済とは根本的に異なり、一大変革をもたらしました。これによって、社会の様子がすっかりかわり、広い地域が次第に政治的にまとまって、後に国家というものが生まれるのも稲作農耕が始まったことによって実現したことと言えます。

●長野盆地の見なれた風景

長野盆地の自然景観は千曲川や犀川などによる土砂の堆積や浸食によって形成されました。現在、私たちは流域の微高地上（自然堤防）に暮らし、その背後の低地（後背湿地）に水田を営んでいます。この現水田面の下より、近年の調査によって古代の水田が発見されています。縄文時代終わり頃には現在みる自然堤防が形成され、以後生活の舞台となってきました。一方、古代の水田は何度も洪水によって埋没しましたが、その都度復旧を果してきたようです。

長野盆地の現在私たちが目にする見なれた水田の風景はいわば古代からの原風景だと言えるでしょう。日本ではいま古来からの水田が埋め立てられ、これまでの歴史と風土につちかわれてきた景観が徐々に姿を消しつつあります。長野盆地の見なれた風景も歴史的な景観として改めて見つめ直すことも必要ではないかと思います。



左から、膝柄鍬・一本鋤・堅杵・膝柄（いずれも石川条里遺跡出土
写真提供：長野県埋蔵文化財センター）

●発掘された古代の水田

石川条里遺跡　千曲川左岸の後背湿地に展開する遺跡で、条里的地域が残されている地域です。主に弥生時代から平安時代までの水田が確認され、微高地からは弥生時代末から古墳時代初めにかけての大規模な祭祀遺構が検出されました。

更埴条里遺跡　千曲川右岸の森将軍塚古墳真下の後背湿地に展開する遺跡で、昭和36年～昭和40年にわたって、全国で始めて平安時代の条里水田を調査しました。さらに、近年の調査によって、水田域と集落域が入り組む平安時代の状況がとらえられています。

川田条里遺跡　千曲川右岸の保科川扇状地末端の後背湿地に展開する遺跡です。調査地内には異なる微地形が存在しているため、水田の区画・水まわしの問題など古代の土地利用を解明する上で豊富な資料が出土しています、また弥生時代から江戸時代に至る埋没水田が重層的に検出されました。

これらの古代の水田は、未来に夢をひらく高速道建設による事前調査によって、先人の生々しい農業技術の様子が明らかにされたものです。

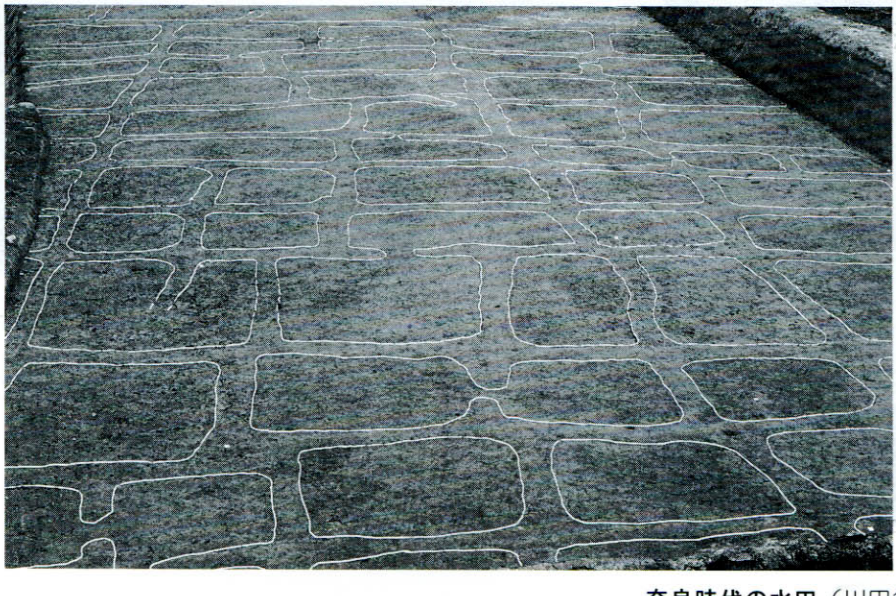
●稲作農耕社会の思想

春の予祝（よしゅく）行事・水口祭り、夏の虫送り、秋の収穫祭など農耕にかかわる習俗は農耕歳時におりこまれながら、伝承されてきているものがたくさんみられます。米づくりは技術的なものもさることながら、多くの信仰的な側面も有しています。こうした習俗の中には、弥生時代以来守られてきているものもあるかと思います。

しかしながら、昨今では水田が埋めたてられ、地上のみなれた風景も減少の一途をたどっています。米輸入自由化問題や国の農業政策などもそれに拍車をかけています。

長野盆地の水田は高速道路によって、地上の姿が消え去りますが、それと引きかえに過去の水田がよみがえるという皮肉な結果となっています。

この展示では、私たちの祖先が営んできた水田の様子やそれにかかわる信仰習俗などの稲作農耕社会の思想や心情の原点を現在の社会状況のもとで見つめ直してみたいと思います。（文責・山口明）



奈良時代の水田（川田条里遺跡）

博物館の所蔵資料から② 八田家旧蔵雛人形

人形を飾り供え物をする行事として、3月3日の上巳の節句（三月節句）のほかに、人日（正月7日七草の節句）、端午（5月5日）、七夕（7月7日）、重陽（9月9日）の五節句や、その年の新穀を取り入れて祝う八朔（陰暦8月1日　田実の節句）などが挙げられます。

そのなかでも三月節句や五月節句で飾られる雛人形、鯉幟などは現代でも人目をひく程華やかになっており、さまざまな種類があります。

当博物館には、松代藩の御用商人であった八田家（長野市松代町）から、明治時代以前に使用されていたとされる雛人形・雛道具・鯉幟・武者人形や内飾りなどが寄贈されています。

三月節句に関しては約170点、五月節句に関しては約140点の資料が八田家の土蔵に眠っていました。当時の飾り方や様子など具体的には分かっていませんが、その量や種類からみても、華やかに飾られていた様子が目に浮かびます。

三月節句では、内裏雛を中心とした壇飾り一式がまず第一に挙げられ、そのほかに日常庶民が使用していた簞笥・膳椀・茶道具・裁縫箱等から、御輿・挟箱・鏡立・懸盤・屏風等の雛道具の種類は多様で、当館が収蔵する雛道具の代表的なものとなっています。

五月節句では鯉幟・弓・旗などの五月道具のほかに、金太郎・鐘馗様から神功皇后と武内宿禰・狐之霊神と龍神などを含む五月人形があり、雛人形とはまた違った意味で華やかさと雄々しさが感じられ、我々の目を楽しませてくれます。

（文責・辻　浩子）

金太郎人形

壇飾り一式のうちの内裏雛

博物館だより　No.23　1992.9.30
編集・発行　長野市立博物館
〒381-22　長野市小島田町1414
☎（0262）84-9011